

2018年5月29日に開催されたパリ日本文化会館・日本友の会総会の席上、友の会新会長・早川茂トヨタ自動車(株)取締役副会長より、パリ日本文化会館活動の日本における「可視化」という目標が掲げられました。それに呼応する形で、不定期ではありますが、当館で行われていることや将来行われること、当館が会館外で後援をしたり、私自身が関与したりしたことなど、ハイライトにして会員の皆様にお伝えしていきたいと思っております。今回はその第一回目になります。

松本零士氏の講演会と「深みへー日本の美意識を求めてー」展の講演会

今月は二つの対象的な講演会が内と外で開催された。一つは当館で行われた漫画・アニメ界の巨匠・松本零士氏の講演会である。

松本零士氏の講演会は、日本に渡航する若者たちを送り出す「JETプログラム」のフランスにおける30周年を記念し、同プログラムの元参加者で形成されるJETAA協会と当館の共催で、また、在仏日本国大使館と自治体国際化協会パリ事務所の後援の下、当館の大ホールで開催したものである。同会には木寺駐仏大使がご出席、冒頭のご挨拶を述べられた。このためにわざわざ外国からやってきた人もいたほどで、大ホール300席が満席となり、終了時には全員が立ち上がって拍手をするほどに好評を博した(写真参照)。松本氏は講演会後に開かれたJETプログラム壮行会レセプションにも最後まで参加され、今年日本に派遣される新JETメンバーとの親交を結ばれた。

この催しはNHKで即刻報じられ、下記のサイトでご覧いただける。

<https://www3.nhk.or.jp/news/html/20180608/k10011468711000.html>

残念ながら私は同じ日の同じ時間帯に開催された別の講演会で冒頭挨拶をすることになってしまったため、この講演会には出席できなかった。



ご講演に続き作画パフォーマンスを披露される松本零士氏

聴衆によるスタンディングオベーション

その講演会はパリ2区のヴィヴィエンヌ通りにあるギャラリー・コルベールで行われた。「ジャポニスム2018」¹の主要事業の一つである「深みへー日本の美意識を求めてー」展に関する導入的な講演会である。同展は「ジャポニスム2018」の最初の展覧会の一つであり、「ジャポニスム2018」で行われる各種催しを総括する展覧会として企画された。7月14日から8月18日までの夏の期間に、

¹ 日仏修好通商条約締結160周年を記念して2018年7月から2019年2月までフランスで開催する日本文化紹介の一大イベント。展覧会や公演、日本の祭りなど、様々な分野で60以上の公式企画が予定されている。

注記: 本稿で意見に相当する部分は筆者の個人的見解を述べたもので、筆者の所属する組織の統一見解ではありません。本稿に従って決断した行為に起因する利害得失はその行為者自身に帰するものとします。

8区パリ商工会議所の向い、ベリエ通りにあるサロモン・ロスシルド館で開催される。

講演者は同展のキュレーターである長谷川祐子を中心に、哲学者のブルーノ・ラトゥール、ルーブル研究所のミシェル・ムニユ、哲学者のジャン=マリー・シェファールの4氏。国際交流基金とフランス社会科学高等研究院（EHESS）の共催で開催された。

長谷川氏によれば、日本の美意識は静と動、悠久と瞬間、バロックとミニマリズム、伝統と近代など対極のものが共存する世界である。同氏はまた「ジャポニスム 2018」開催の意義は、人間中心主義によって引き起こされた環境変化やテロ、移民の問題に直面している時代にあって、フランスや欧州が新たな方向性を模索するヒントを提示することにあるといい、とりわけ「深みへ」展は現在と過去が共存共生する日本のメッセージを伝えるものでもある。同展は来場者たちを既存の紋切型を超えて日本の美意識の本質的深みへと導くように構成されている。縄文から現代までの5000年間の連続と続く美意識の流れを、縄文土器とアンリアレージの作品、龍安寺の石庭とリー・ウーファンの作品など昔と今の作品を対比させたり、円空とピカソ、田村一村とゴッガンなど日本と西洋の作品を対置させるなど、時代と国を超えて共通項を探りながら、作品と鑑賞者が対話し、新たな展望と視野をもたらす旅へと誘う構成となっている。25名のアーティストによる100点ほどが展示される。会場構成は妹島和世氏の率いるSANAA事務所が担当している。以上が展覧会のコンセプトと概要である。

これに対し、ラトゥール氏はミシシッピ河の洪水被害対策で行われた米国の科学者たちのアニミズム的な手法を紹介して、西洋にも日本的な発想があることを紹介し、西洋主義と東洋主義の違いをことさら強調するのは如何なものかと疑問を呈した。

ムニユ氏は絵画の科学的分析の立場から、フランスと日本の画家の光と影の使い方の違いを述べ、日本では『陰影礼賛』で影が重要視されているが、古来、日本の伝統絵画に影の描写が少ない点を強調した。また、マネと藤田の婦人像に影がないという現象も指摘、相互影響の可能性を示唆した。

シェファール氏は京都の曹洞宗の禅寺・源光庵の円と四角の窓を通して見える四季の草木の移ろいを借景にした建物の絵画的開口部を例に、日本の美意識を解説した。



4人の講演者（左からムニユ、長谷川、シェファール、ラトゥールの各氏 源光庵の明り取りを例に講演するシェファール氏

会場には100人弱の聴衆がいたが、非常に熱心に議論に耳を傾けていた。質問等の内容から、哲学や美術などの専門家が聴衆の大半を占めていたように思われる。「深みへ-日本の美意識を求めて-」展を事前に理解してもらう良い機会になったと思われる。

上記二つの講演会は、ポピュラーな分野と専門的分野との異質の内容であったが、どちらも会館を知ってもらう有意義な催しであった。